カントの『判斷力批判』に就て

深田康算

カントの『判斷力批判』の發生史に關して、經りたる結果を整理することの出來る迄、自分の心覺えとして、次の斷片を記して置きたい。

一

『判斷力の批判』が、カントの哲學體系の發展に關する重要書類として、又美學史上の劃期的著作として、二重に大きい意味を持つてゐることは、已に人々の能く知つて居る所である。三つの『批判』の一々が有する關係的地位、從つて『判斷力の批判』をカントの體系の完成若しくは頂點と見るべきか、或は寧ろ體系の中心から横途へ外れたものと見るべきか、に關しては、學者の間に、カントの體系を何と見るかに依つて、自ら異論が絶えないであらう。併し少くともヰンデルバンドが云つてゐる樣に『判斷力の批判』を彼の著書の中『最も驚くべきもの』(das Gewaltigste seiner Werke)と評することに

は何人も恐らく異存はあるまい。美學史の上から云へば、他に類の無い程『人を動かす力』を持つてゐる（wie wenige ein anregendes Buch）と云ふキューネマンの贊辭は確かに適評である。此書の殆んど何の部分を取つて見ても、夫れが曾て思想家の問題となり又、今でも問題となつてゐる事柄を取扱つてゐない個所はない。例を嚴密に美學にのみ關係ある個處丈に限つても、例へば快適と善と美と崇高との區別の如き、美の社會的意味の如き、（第四十及第四十一節）自然美と道德的觀念との關係の如き、（第四十二節）色と音との有する象徵的意味の如き、（同上）而して又天才に關する論の如き、（第四十六節より第五十節）カントの書き殘した片言雙語も（恐らくは吾々は誇張なしに斯く云ひ得るであらう）夫自らが夫々『創業』であつたと共に、學界に於ける『翼ある言葉』となつてゐる。

然しながら總ての有名な事件がさうである如く、總ての大きい書物は、其意味其解釋に就て、他の人々から色々に解せられ又色々に見られる運命を持つてゐる。カントの『判斷力批判』も亦、人の思索を刺戟する力のあることには、人々一致して居るに拘はらず、何が其の思想の中で此の力を持つてゐるのかに就ては、學者の間に一致は見出されない樣である。美學上の主情說や形式說や主觀說や乃至理想說や美的假象

說及び其他の多くの說、――是等の名稱は皆夫々相當の妥當さを以てカントの美學說を呼ぶに應はしい。夫であるからして、若し吾々が是等の學說の孰れをもカントのであると見るとの出來る點から云へば、一方に於ては『判斷力批判』は種々なる(時としては相容れない所の)多くの立場を包含するものとして、色々の方面に色々の見方を刺戟するとして、其所に人をして考へさす所の力、暗示の力があるとも云へるであらう。併し夫れは同時に他方に於ては、さう云ふ切り嵌め細工として且つ其材料の大多數が或形に於て彼以前及び彼と同時代の書籍に見出される以上は尙更(一)上に云ふ樣な刺戟暗示の力があると丈けは云ひ得ても、カントの學說に夫自らの生活力があるとは云へないことになるであらう。意味深いカントの言句が『翼ある言葉』として學界に擴がつてゐるにしても、夫れを指して彼の『創業』であると云ふことは出來ないことになるであらう。キルヒマンの樣に、『判斷力批判』は吾々に取つて最早唯文學的史的價値を有するに過ぎぬ(für die Gegenwart nur noch einen literarisch-historischen Wert)とは思はぬ者は、カントの美學說が何う云ふ意味で吾々に取つても尙意義を有するかに就て、能く考へて見る必要がある。何が彼の思想のうち已に死せる部分であり、何が今尙生きて、居る部分であるか――之れが『判斷力の批判』に就ても先づ考

へられなければならぬ問題である。

（一）Otto Seplapp, Kants Lehre vom Genie und die Kritik der Urteilskraft. 1901. 參照。但し此書は戰亂の爲めに荷着荷せぬ故に、私は未だ之を手にする機會を得ないで居る。今は唯 Windelband が Königlich Preussische Akademie der Wissenschaften 刊行のカント全集第五卷に載せた『判斷力批判』序論及び J. C. Meredith, Kant's Critique of Aesthitic Judgment, 1914. の記述に據る。之に由ればカントは彼の時代の純文學をも亦藝術論に關する著述をも極めて廣く涉獵し能く之に通曉して居つたとが分かる。而してメレヂスに由れば、カントが云ひ現はしてゐる興味ある又明快なる觀察の大多數は、已に先人に依つて唱へられたものに外ならないことも明かである。其他快適と美との區別が已にエリソン(Alison)に依つて立てられ、美と崇高との分類の形式の如きバーク(Burke)に基ゐてゐることは今更云ふ迄もない。――唯附加へて置きたいことは、是等の典據の指摘は、是等の學者に依つてカントを小さくする目的で試みられたのではないと云ふこと、及び斷はる迄もなく、私が之れを擧げるのも其目的の爲めではないと云ふことである。

夫れに就て想ひ起されるのは、バビット(Babitt, the New Laocoon)が、レッシングの思想の據り所は却つて彼が攻擊したケーリユス伯に在ると云つた批評である。『ラオコーン』を讀んだ者が想像する程、ケーリユス伯は笑ふべき考を唱へてゐるのではないと云ふ事實は、吾吾に、總ての批評論難を讀む場合に、用心せねばならぬと云ふ敎訓を與へる。而して典據の指摘は此際に於てもバビットに依つて、夫丈けでレッシングの批評家としての地位を低める理由とはせられて居らない。レッシングは獨逸人が考へて居る程、偉大な批評家

でないとバビットは見て居る。併し其理由は他の思想を借りたと云ふ(レッシングも已に自ら之れを自己批評に於て告白してゐる)點ではない。夫れに就て又想ひ起されるのは、カントとレッシングとの思想上の交渉である。併し夫れは此所ではあまりに傍徑に入ることとなる。

二

『判斷力批判』が、カント以後の哲學者及び美學者に、深い又廣い影響を與へた所以は、云ふ迄もなく、上に述べた樣に、其極めて包括的な點に在る。夫れは歷史が證明してゐる如く、殆んど如何なる見地に立つ學者でも、カントの中に自己の觀察及思想と共通する一面を見出さないことの無い程に包括的である。然し包括的であると云ふ事實は、單に多樣な見地が並列共存して居ると云ふ點に、重きを置いて見るべきではなくして、寧ろ夫れ程雜多な觀察や思想が包括せられてゐる、纏められてゐると云ふ點を注意すべきであらう。而して之れを包括し引纏めてゐる帶とも云ふべきものが、卽ちカントの獨創の仕事であると見るべきであらう。夫故に若しカントの美學說に生活力があると認め得るとするならば、夫れは種々なる學說を生む雜多な種子を胚胎してゐる點に其理由を求むべきではない。寧ろ色々な發光體から放射する

所の光線を、或一つの燒點に集注せしめる力、――夫れがカントの場合に於ては何であつたかを考へ、而して此力が果して今も尙吾々に取つても有力であるかを考へなければならない。詳言すれば、吾々は三つのものを彼の學說に就て區別して見ることが出來る。第一は彼の學說の構成に云はゞ材料として要素として入り込む爲めに與へられて居つた所の諸種の觀察及思想、第二は夫等の材料に基ゐて形づくられた成果としてのカントの學說、而して第三には彼材料に據つて此學說の形に、卽ち素材を精製せられたる完成品に纏める働を爲した所の力(二)。吾々は必しも第一に屬するものが今日では最早價値がないとは考へない、のみならず、消極的要素として織り込まれたとも云ふべき例へばカントに依つて打勝れたバークの思想の如きに對しても可なり大なる價値を認むるものである。又第二に屬するものを其儘吾々が繼承しなければならぬとは考へない。然し吾々に取つて最も重要なる事柄は如何にしても第三の點に在るのではないかと思はれる。而して夫れは云ふ迄もなく批判的精神若しくは批判的方法に外ならない。カントの美學說の中何の部分が死したるもの、何の部分が生きて居るものであるかと云ふ問に對して、稍極端に、思ひ切つて答へやうとするならば、彼の材料は已に死したるもの、又彼の學說の構成態も已に

死したるもの、唯其方法若しくは其精神は今も尙生きて居る部分に屬すと云つても大なる誤ではあるまいと考へる。而して斯く考へることを、十分なる理由を提示して主張する爲めには、一方に於て(私も已に曾て試みた如く)心理學的美學と云はるるもの、經驗的科學としての美學と云はるるものに對して、批判的美學の立場及權利を闡明しなければならない(二)。而して他方に於ては、批判的美學は決して、屢さう取られる樣に美的經驗の單なる言明に盡きるものでもなく、又論理的構成を以て具象的な事實に代へやうとするものでもないと(三)。換言すれば、プラトーの哲學が或はさう云はれる如き一種の詩でもなく、又ヘーゲルの哲學が常にそう評される如く、唯理的構成でもあり得ぬことを詳論しなければならない。是等の辯明は、其形式をでなく其精神に於て、カント自身から多くの援助を受け得る。卽ちカントの美學說が左右若しくは腹背に引き受けた敵として戰つた學說は、バウムガルテン流の唯理主義とバーク流の經驗主義とであり、而して新らしい言葉を借りて云へば、美學は『美學の爲めの美學』であつて、趣味の形成及涵養には關係がないと云ふともカント自ら其緖言に於て言明してゐる所である。又是等の辨明に依つて、美的經驗が如何にして可能なるかを反省する批判的美學は、事實から遠ざかるのでないばかりでなくして、實は

本當の意味で事實に接觸を努めるのであると、論理に立つて事實に命令を下さうとすものではなくして、却つて理知が自己に特有なる權限を認めて、夫れに相應する謙遜の態度に立つことを要求すのであることが明かにせられるであらう。而して又自然科學的研究法の外に、之れと孤立し之れと引離されてゐる批判的研究法なるものがあるのではないと云ふとも(四)、而して最後にカントの美學說が包括的であり得た所以は卽ち夫れが批判的であつたのに基くと云ふとも、自ら明かにせられ得るであらう。批判的見地は目的論的見地として必然に包括的統一的でなければならない。

(一)　斯く三つのものを分けて見るのは、斷はる迄もなく方便である。第一のものは比較的に容易に摘出し得るかの如くに思はれるけれども、夫さへ外見上丈けに過ぎない。第二のもの、卽ち成果としてのカントの學說に就ては、一つには、之れを第三のものと截然峻別することが出來ないのみならず、二つには、カントの美學說が一體何であるかを要約することすら極めて困難である。此困難は一部分はカントの論述の方法の一種獨特なるに依る。メレヂスの云ふ如くカントの展開法(exposition)は少くとも『判斷力批判』に於ては極めてドラマチツクである。一節一節が夫々別々の役目を演じてゐる。一人の役者の臺詞を以て、例へば劇作家の本心だと見做すことが出來ないやうに、或一節に述べてある議論が其儘カントの本心であると見做す事の出來ない場合が少なくない。例へば第四十節から第五十九節に至る論述。卽ち全體を見てその各部の夫々持つてゐる微妙な相互

の關係を味つた上でなければ第二に屬するものゝ正體が分らないのである。而して全體の構成を理解する爲めには、當然其精神である所の第三が重要だと云ふことになる。上に云つた困難の外『判斷力批判』に於て、殊に吾々の忍耐力に訴へる反覆と冗漫との數個所に就ては、吾々は唯止むを得ざる不運として――恰も何故カントが獨逸語で書いたのかと嘆くことをしない如く――沈默を守る。尤も此反覆の或ものは、何の個所が先きに、何の個所が後に書き加へられたかを推測する材料となる事を思へば寧ろ興味ある難有い缺點とでも云ふべきであらう。(此點及び議論のある誤植? 二個所に就ては他日詳論する機會があると思ふ)。――唯此所でも早く注意して置かなければならぬことは、何所までカントの持つてゐる形式論理に對する嗜好を、批判主義に必然的本質的のものと見るべきかの問題である。論理主義は直ちに批判主義だと云ふべきではない。併し批判主義は、カントに於ては論理主義と誤まられ易い程に其れと深い緣を結んで居る。之れをカントの、其主義に拘はらず、寧ろ其主義を裏切る所の性癖から余儀なくされた野合と見るべきではなからうか否か。此論理的外形――必要以上に論理的型式を借りる取扱ひ方は、カントの學說の理解を困難ならしめる一つの原因である。カントの學說を徹底的に研究した佛人最初の一人だと云はれるジューベール(J. Joubert, 1751—1824)が苦しんだ所も實に其所にある。『カントの思想』を捕へるとは、恰も駝鳥の卵に頭を打ち當てゝ之れを打ち破らうとするのに似てゐる。而して打ち破つて見れば大抵中は空虛であるのに似てゐる』と彼は云つて居る(Correspondence, P. 61)。尤も之れは或婦人(Mme de Beaumont)に書き送つた文句であり、又ジューベールの讀んだのは『純粹理性批判』の而かも拉丁譯であつたと推察せられる。併し論理偏重の傾向がカントに附いて居ることは『判斷力批判』の最初の部

分にも認められる。そを如何に解すべきかは、カントの美學說を理解する爲めにも、又批判主義の本體を捕捉する爲めにも重要なる事柄だと思はれる。

(11) 批判的美學と心理學的美學との議論に就ては J. Cohn, Psychologische oder Kritische Begründung der Aesthetik? (Arch. f. System. Philosophie X. S 131—159) 及び E. Puffer, Psychology of Beauty, 1905. P. 33 ff 參照。批判的美學と藝術學との關係に就ては、Aloys Fischer, Aesthetik und Kunstwiss. (Münchener Philosoph. Abhandlungen, 1911, S. 100—124) 參照。尙拙稿『美の研究』藝文第四年第四號所載。

(111) Santayana, Sense of Beauty, 1896 は naturalistic psychology の立場に立つて philosophical aesthetics として、(夫れとしての或價値は認めては居るが)詩人の仕事であると考へてゐる。Fechner, Vorschule der Aesthetik の所謂『上からの美學』と『下からの美學』との區別及『下からの美學』の主張に對する非難はハルトマンの論じてゐる所で盡きてゐるやうに思はれる。E. Hartmann, Die deutsche Aesthetik seit Kant, S, 328—330.

(四) 自然科學的研究法の外に、研究方法として別に批判的方法なるものが有り得ぬと云ふ點は、例へば Paul Barth, Philosophie der Geschichte als Sociologie, 1897 S. 369 ff 及び H. Ebbinghaus, "über erklärende und beschreibende Psychologie" (Zeitsch. f. Psych. und Physiol. d. Sinnesorg, IX, S. 161, ff, S. 195) の述べてゐる所に明かである。而して批判的方法(誤解を避ける爲めには、之れを研究法若しくは方法と呼ぶよりも見地若しくは精神と云ふ方が穩當であらう、若しくは Methode と Methodologisch との別をさへ明かに區別すれば十分なのである)とは如何なる考へ方であるかに就ては、Windelband, Kritische oder genetische Methode? (Präludien) 參照。私の考に依れば此問題に關して十分なる理解を持ち、正當なる結論に到着する爲めには、方法(Methode)と云ふことの二つの意味を嚴重に區別することが必要である。即ち一は研究方法、認識の技術といふ意味、一は經驗

の(從つて其認識の)可能である爲めに必要な見地。所謂批判的方法とは、學術的研究法(卽ち自然科學的研究法若しくは論理的方法)と別に之れと對立する直覺的方法(intuitive Methode)と云ふ如きものでもなければ、又心理學的方法に對して區別せらるる論理的方法(logische, dialektische Methode)と云ふ如きものでもない。

三

上述の如くに見るならば、カントの美學說に於て最も吾々に重要なる點は、其批判的精神者しくは批判主義若しくは批判的方法であると云つて差支がないであらう。而して斯く見ることは、『判斷力批判』の起源發生史に重要なる意味を認めることである。卽ち斯く見る以上は吾々は、此『批判』が如何なる經路を通つて形成せられたかの歷史に對して深甚の興味を感じなければならぬ(一)。何故ならば、カントが第三の『批判』を完成する迄の經路は、一方に於ては、美學が經驗的科學たるに過ぎない境遇から、批判的美學に高められるに至つた道程を明かにする點に於て、批判的と云ふことの意味を理解する上に大切な知識を吾々に供給する。而して他方に於ては、此『批判』に於てカントは始めて判斷力、尙嚴密に云へば、反省的判斷力(reflektierende Urteilskraft)

の存在と意義とを確立した點に於て、批判哲學の根本的見地を之に至つて始めて明瞭に(換言すれば、單に批判哲學の隱れたる動力たりしものを之に至つて始めて思索の對象として)意識したと云へる點に於て、吾々は此所に彼の哲學の最も根本的なるものの展開を認めることが出來ると云ひ得るからである(二)。

但し以上の如くに考へて、『判斷力批判』の(云ふ迄もなく、カントが如何なる順序を經て之れを著述したかの事實の上からではなく、云はば論理上彼の思想體系の如何なる必然がカントを此『批判』に導いたかの點から見ての)發生史に極めて重大な意義を認めるに當つて、二つの注意して置くべき事柄が存する。其一はカントの美學說が現代の吾々に取つて如何なる價値を有するかに拘はらず、假令假りに夫れはキルヒマンの云ふ如く單に文學的史的價値を有するに過ぎないとしても、卽ち、今は已に歷史に屬するもの、潑溂たる生氣はないものであると見られる場合に於ても、『判斷力批判』の發生史は、カントの美學說を理解する爲めには極めて必要な研究事項だと云ふ點である。カントに依つて始めて美學が獨立したこと、隨つて美的文化(Aesthetische Kultur)が文化の獨立の一分野とせられたことは、若し假りに其論據が今日では通用せぬものとなつてるのだとしても、歷史上の事件として重要なる意味のあることは變

りがない。夫れであるからして、此『批判』の發生史は、カントの學說に關して如何なる評價及認定を下す者に取つても、重要の程度は同じことであると云はなければならない。而して夫故に、カントの學說に今も尙生きてゐる部分を認めようとする者は、嚴重なる注意の下に、歷史上からの重要さと、吾々自らの(多少に拘はらぬ)組織的仕事に取つて夫れが有する重要さとを、混同することの誤を避けねばならない。多くの場合に於て、史的重要は自ら體系的重要であり、吾々の思想の限界線に於ては畢竟此二者は同一のものと假定せられなければならぬのであらう。然しながら、夫れは云ふ迄もなく、吾々が到達すべく努めなければならぬ標的であつて、其上に直ちに、若しくは已に、吾々が立つて居ると考ふべき地盤ではない。與へられたるものとしての史的重要は、其重要を吾々のものとする爲めに(卽ち、吾々自らの組織的仕事に重要なるものであると認める爲めに)は、吾々は之れを贏ち得なければならない。さう云ふ事情の下に置かれてゐる以上、『判斷力批判』の發生史に就ての研究は、一方に於ては、カントの學說の中心に突進する最も適當なる途としての役目を有すると共に、他方に於ては、同時に、吾々が或度まで已に假定して出發しなければならなかつた吾々自らの見地を、自ら反省しつつ確めるの機會を與へるものである。換言すれば、カントの

美學說に一種の生活力を認め、又『判斷力批判』が批判哲學に於て占めてゐる重要な地位を認める者に取つては、其發生史の研究は單なる歷史的叙述に止まることは出來ないのである。而して事實上『判斷力批判』の發生史は決して簡單なる事件ではなくして、色々に解釋を下し得る餘地の十分に在る一つの問題なのである(三)。

第二に注意すべき事柄は、上述の點と自ら關係してゐることであるが、カントの美學說の中最も重要なる點が其批判的たる處に在りと見、又『判斷力批判』が彼の體系の上に於て占めてゐる地位を認める場合に、之れを認めると云ふことは一つであつても、之れを認める理由若しくは立場は色々あり得ると云ふことである。例へば『判斷力批判』の最初の部分に於ける美的判斷の、論理的模型に從へる分析 (Analytik des Schönen, 1. der Qualität nach, 2. der Quantität nach, 3. nach der Relation, 4. nach der Modalität)の如きは、何人にも不思議なる少くとも奇妙なる取扱ひ方であると思はれる。而して此分析の意味に就ての見解は、カントの思想の何の點に重きを置くかに從つて、自ら異ならざるを得ない。卽ち形式論理と哲學とがカントに於て密接なる結合を示してゐることを、彼の特殊の、云はば性癖とも嗜好とも見ようとする者と、之れを批判哲學の本質的要素と見ようとする者との間には、批判的と云ふことを重んずると云ふ點に於

ての一致は有り得るに拘はらず、何が其本質であるかと云ふ點に就ては、見解が自ら背馳せざるを得ないわけである。其直接の結果は、カントが與へた美の定義の四つの形式の關係的價値に就ての評價の異同として現はれ、尙引いて『判斷力批判』の批判體系に於ける重要さに關する輕重の差異に導かなければならぬ。而して是等の異同輕重が、必しも二つ若しくは三つの截然區別せられ得る意見に分類せられて盡きるものではないことは、僅かに二三の學者の論說を檢査して見ても明瞭である(例へばクーノー・フィッシャー、ボンデルバント、キューネマン及びメレヂス)。夫れ故に上來述べて來た樣な見地に立つて、『判斷力批判』の發生史を嚴密に取扱ふ爲めには、一方に於て、吾々の發足の最初に吾々自らが立たなければならぬと信じてゐる見地を途中に於て見失つてはならぬと共に、他方に於ては、此見地は研究の途上に於て漸次限定され行くことをも注意しなければならない。

(一)『判斷力批判』の發生史の研究に重要なる事項は次の如くである。

(甲) カントが始め經驗的科學としてのみ美學の可能を考へてゐた時期("empiristische" Periode)の材料。

(1) Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen, 1764.

(2) Nachricht von der Einrichtung seiner Vorlesungen vom 1765-66.

(3) Kant's Brief an Marcus Herz, vom 7. Juni 1771.

(4) Kritik der reinen Vernunft, 1. auf. 1781 S. 21, Anmerkung.

(5) ,, 2. auf. (1787) S. 35 Anmerkung. („eine bemerkenswerte Veränderung")

(乙)『判斷力批判』の計畫其著述の進行及變遷を示す所の材料。

(1) Berings Brief an Kant, vom 28. Mai 1787. („Grundlegung zur Kritik des Geschmacks")

(2) Kants Brief an Chr. G. Schütz, vom 25. Juni 1787. („Grundlage der Kritik des Geschmacks")

(3) Kants Brief an C. L. Reinhold, vom 28. Dezember 1787. („Kritik des Geschmacks")

(4) ,, ,, vom 12. Mai 1789. („Kritik der Urteilskraft")

(丙)『判斷力批判』。

(1) Kritik der Urteilskraft, 1790.

(2) „Anmerkungen zur Einleitung in die Kritik der Urteilskraft", J. S. Beck: Erläuternde Auszug aus den Kritischen Schriften des Hr. Prof. Kant auf Anraten desselben, Bd II, 1794.

(二)『判斷力批判』が三つの『批判』の中に於て占むべき地位に就て、及び何故に例へば是れが最優勝の地位を占めてゐると認むべきかに就ては學者の見解は一つではない。ヘーゲルやシェリングが此『批判』に對して最も大なる尊敬を拂つてゐたことは人の知る所であるが、其理由に對しては、同意を表する者は、形而上學に執拗なる(而して當然な)疑を抱く人々の間に見出されないであらう。所謂認識論の興味が盛であつた時勢、及び一般の評價に於ては、カントの主著は當然『純粹理性批判』である。然しながら『判斷力批判』の重要なことは、單に『純粹理性批判』と『實踐理性批判』との間に存在する所謂間隙を塡充すると云ふ以上に、批判哲學の根柢に横はつてゐる態度そのものが悟性の夫れでもなく、又理性の夫れで

もなくして、寧ろ反省的(或は省察的)判斷の態度であると見られ得る限り、此判斷力の特性を確立した『判斷力批判』は其點で全批判哲學の根柢に觸れてゐるものと云ひ得るのではなからうか。一體、批判若しくは批評の態度とは、畢竟、カントの所謂悟性の態度でもなく、又(狹義に云ふ)理性の態度でもなくして、反省的判斷力の態度ではないか。而して批判哲學の全體は、悟性と理性と判斷力の夫々の權限と領域とを規定しようと云ふ側から見ても、對象の差異、領域の區劃の最後の根基を、吾々の精神(若しくは經驗を可能ならしめるもの)の能力若しくは機能に基づけようと云ふ側から見ても、つまり打ち立てられるべき(與へられては居らない、即ち『かのやうに』見られた)目的の下に統一を試み又努める所の反省的判斷力の生産物と考へられ得るのではないか。此點に關してメレヂス(前揭の著書 P. XVIII-XIX)の云ふ所は注意すべきものと思はれる。彼は云ふ、the standpoint of Kant's Critique (of Judgment was the *a Priori* standpoint of the *Critical* faculty.) It is with the reflective judgment, therefore, rather than with reason, that Kant's Critical philosophy is most intimately connected. This is not alone true of the Critique, but of the transcendental philosophy as a whole. Its point of view (as opposed to its subject-matter) is as obviously that of judgment and the conception of teleological unity (which *looks out towards* reason as Hegel's is that of reason and the unity of the syllogism. (P. XIX) キンデルバントが『判斷力批判』を最もゲヴルチツヒ)と考へるのもやはり之れと同じ見方から來て居ることは明かである。

(三) 『判斷力批判』の發生史に關して私の渉獵し得た主なる參考書は

(1) K. Fischer, Gesch. d. neueren Philos. Bd. 5, S. 397-422.

(2) W. Windelband, Einleitung (Kant's gesammelte Schriften, herausgegeben von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 5, S. 513-527.

(3) E. Kühnemann, Kants und Schillers Begründung der Aesthetik, S. 1-71.

(4) J. C. Meredith, Kant's Critique of Aesthetic judgment. P. V-CLXX.

Otto Schlapp の書及び H. Cohen, Kants Begründung der Aesthetik, 1889, 及び B. Erdmann 版に載せてある序論等は前に述べた理由で、私の未だ見るを得なかつたものに屬する。而して是等の諸書と『判斷力批判』との研究に依つて、其發生史の途を通つて、批判的美學の職能と權限とを明かにするのが――此論文には單に其方向を示し得るに止まつた――私の目的であつたのである。（完）